

記憶が人間関係を形作る。他愛のない言葉のやりとりや、協力して乗り越えた困難など様々な思い出が、人と人とを強固に繋ぎ、絆となる。その記憶や大切な人との絆を奪い、人格をも変えてしまう認知症は残酷な病気である。今や65歳以上の五人に一人が罹患するといわれている認知症。私の祖母もその一人だった。

祖母は元々、穏やかな性格で、会う度に見せてくれる優しい笑顔が、私は大好きだった。しかし、私が小学五年生の時、祖母は認知症と診断され、グループホームに入所した。初めのうちは、以前と変わらないあの優しい笑顔で私達を迎え入れてくれたが、次第に表情から笑顔が消えてゆき、思い通りにならない現状に対して暴言を吐く様になった。そして遂には、実の娘である私の母を、自分の姉であると勘違いし、しきりに「帰りたい、帰りたい」と泣き叫ぶ様になった。そんな変わり果てた祖母の姿を目の当たりにした時、どうする事もできない無力な自分へのもどかしさと同時に、あの優しかった祖母にはもう二度と会えないという喪失感に苛まれたのを、今でも鮮明に覚えている。

二〇一八年十二月七日、八十八歳の誕生日前日、祖母は亡くなった。認知症によって自分が自分でなくなってしまう不安と、先の見えない絶望の中、祖母はたった独りで闘っていた。私は最後まで、祖母をその孤独から救い出す事ができなかった。この後悔はもう二度と繰り返したくない。祖母の死がきっかけで、私の心には強い決意が芽生えた。必ずや医師になって認知症の根本的な治療薬を開発する。そして患者本人だけでなくその家族も救える医師になる。そう強く心に誓った。

高齢化の急速な進行に伴って、認知症患者の数は加速度的に増え続け、二〇二五年には約七百万人にも昇ると予測されている。認知症はゴミ屋敷、孤独死の増加や介護に苦しんだ末の殺人など、様々な社会問題を引き起こす原因にもなっており、その対策は喫緊の課題となっている。しかし、認知症の根本的な治療薬は未だ開発されておらず、最新の研究においても進行を遅らせる薬の開発にとどまっている。

治療薬の開発を目指すうえで私は未知のものへのチャレンジ精神、主体性、国際的な幅広い視野が必要不可欠であると考え、高校二年生の夏に、UCL-Japan Youth Challengeに参加した。それは日本と英国の高校生を対象としたサマースクールプログラムで、ロンドン大学やケンブリッジ大学に実際足を運び、世界トップクラスの講義を体験したり英国の生徒達と社会問題について議論を交わしたりした。生まれた国や育ってきた環境が全く異なる学生達の意見は非常に新鮮で、グローバルな視野を享受するきっかけとなっただけでなく、主体性を持って挑戦する精神を構築することができた。

また、医師や研究者に不可欠であるリーダーシップを育むうえで、何かヒントを得られればと思い、あいちスタートアップスクールに参加し、実際に起業体験をしたり、起業家の方々と交流したりした。0から1を作り出す難しさや、判断力や決断力、協調性が求められるという点で、起業家と研究医は大いに通ずる部分があると感じた。このプログラムを通して、志の高い同世代の仲間とも出会うことができ、英国で学んだチャレンジ精神を持って新たな事に挑戦した甲斐があったと思った。これらの貴重な体験から学んだ事を忘れず、これからも探究心や向上心を持って様々な事に挑戦し、確かな足取りで自分の目標に向かって進んで行こうと思う。

祖母は認知症によって、多くの記憶を失い先の見えない不安の中、闘い続けていた。そして今この瞬間も祖母と同じように認知症に苦しんでいる人がいる。私はそういう人達が希望の道を開く手助けとなる存在になりたい。新たな道を作るのは難しいが、道ができれば皆が歩ける。私は必ず医師になり、認知症の根本的な治療薬を開発する。そして祖母のように苦しむ人を一人でも多く救い、一人でも多くの人の笑顔、私が取り戻す。